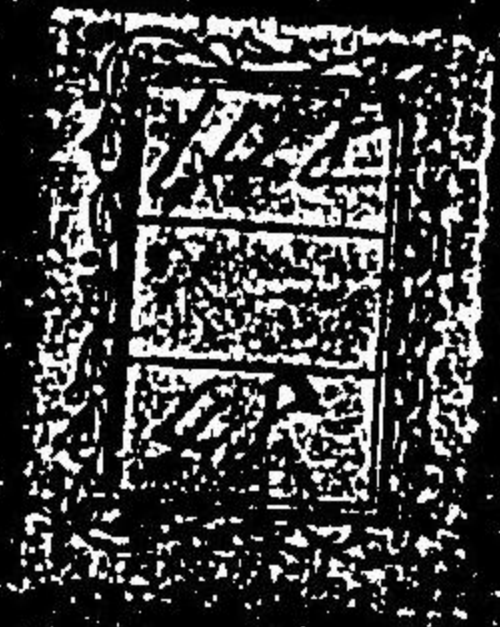


堺史談

河盛彦三郎著
全



025444-000-1

特28-310

堺史談

河盛 彦三郎/著

M27

ADC-2896



特28
310



堺史談



緒言

一この書は堺の小學校兒童に歴史科を授くる
階梯となさんがため郷土の史談を集めてこ
れを連ねるとたるものなり

一この書は専ら事柄の慥かなる者のみをかき
とると其文章の如きは字句を飾らば文法を
鍊らばたゞ兒童に會得と易からとむ

一歴史の地理に於るはそれ猶ほ讀書の作文に
於るか如く極めて關係のとけきものなれば
この書もまた勢ひ地理にわたる嫌ひなきに

あらず讀むものそれ之を察せられよ

明治二十七年一月

著者とるす

堺史談目次

- 第一章 和泉國の起源并に茅渟海の事
- 第二章 堺地名及び領主沿革の事
- 第三章 堺の人口戸數の事
- 第四章 堺古昔外國との交易場たりと事
- 第五章 南宗寺
- 第六章 大安寺
- 第七章 妙國寺
- 第八章 祥雲寺
- 第九章 開口社

第十章 菅原社

第十一章 宿院

第十二章 方違社

第十三章 大仙陵

第十四章 武人

第十五章 文學

第十六章 技藝

第十七章 商業

第十八章 工業

第十九章 風俗

第二十章 景況

第二十一章 結論

塚史談

第二章

和泉國の起源并に茅渟海の事

和泉國は、往古河内國に屬し、茅渟海に臨める諸郡たり。神功皇后、新羅を征し給ふの時、地中俄に浪の如き聲して、泉の潰き出づる事一文に餘れり、其流れ清く味も亦美なり、故に其地を名けて、泉郡と云ふ。三韓既に平ぎ、皇后歸り玉ふの日、此の地を過ぎ之を賞し玉ふ現今國府の清水是れなり。元正天皇、靈龜二年四月、大鳥、泉、日根の三郡

と割き改めて和泉國と號す。西方一帶海に面す乃ち茅渚の海と云ふ、蓋し神武天皇東中洲を征と給ひし時、天皇の兄五瀬命流れ矢に當り、矢瘡と此の海に滌ぎ給ふ故に其海を指して血沼と云ふ、後改めて茅渚の海と稱す

第二章 堺地名及び領主沿革の事

堺は、攝、河、泉、三國の境にして、元來地名には非ざるなり。其境界に、開口木戸原の三村ありしも後其村名は消へ失せ、唯た堺とのみ稱し來りて遂

に地名とはなれり、永徳二年、山名氏清、紀伊、和泉、二國を領し堺に居住す、明德二年氏清、足利氏に叛きて亡び、大内義弘代て之を領す、應永六年義弘亦足利氏に叛て亡ぶ、其の後三好氏の領地となる。永正元年二月三好長輝、當地の北方海船の濱に於て一大家屋を營む、其建築頗る廣大にして、未だ落成に至らば、長輝既に卒す、其子海雲齊長基と云ふ者、父の志を繼ぎ、始めて成功に至る。大永元年三月勅して、政所の号を給ひしも、惜ひかな此の家、後に兵火の爲めに焼き失はれたり。

三好氏亡びて、織田信長、又之に代りて、近畿諸州を領す、乃ち松井友閑をして、此の地に代官たらしむ。豊臣秀吉の代に至りて、石田三成、奉行となる、其後近く明治の初年に至るまで世々町奉行を置き、此の地の政を執らしむ。維新の後此の地に堺縣を置き、和、河、泉、三國を管し、税所篤、縣令となる。明治十四年二月堺縣は廢せられ、大阪府に併すに及て、此の地も亦た、大阪府の管下となれり。

第三章 堺の人口戸數の事

昔堺市の人口、戸數、何程ありしや、詳かに知るに由なしと雖も、應永六年、大内義弘、亡ぶるの時に際し、兵火に罹る戸數凡そ一萬と古記に見へたり。中古寛文五年六月の調べに據れば、戸數二萬七千五百二十三戸、人口六萬九千三百六十八人、蓋し古き記録に載する所なり。今明治二十四年十二月の調べに、戸數一萬一千四百七戸、人口四萬四千五百三十四人、彼れ此れ比較するときは其戸數人口共に甚た減せり、乃ち此の地の、古へ

繁盛なりと事想ひ知るべし。

第四章 堺古昔外國との交易場たりと事

昔堺に於て、外國と商賣交易をなせし事柄は、大内義弘、此の地を領せし時、支那よりの使者往來常に絶ゆるを、是に於て堺の商人、皆争て支那、朝鮮、呂宋、印度、等の各國に往返し、各國の商船も亦た、爰に來て交易をなす、故に當時堺の商人は、皆交易の利を私し其富有なる事は、天下の第一に居り、實に我國商業の中心たり。其の頃大阪は未だ

寥とさき一村落にして、近畿都會の地は、京師と唯た此堺あるのみ、故に諸國の大名諸役人より、萬民の多きに至るまで皆爰に來り遊び、其繁華實に京師と比べ稱すべし。元和寛永の際、堺の豪商具足屋治右衛門と云ふ者、専ら力を交易のことに盡し其葡萄牙と來往せし書類、今に末孫の家に傳へ殘せりと云ふ。

第五章 南宗寺

南宗寺は堺第一の大寺にして、境内極めて廣し

京師紫野大徳寺の末寺にして、三好修理の大夫長慶曾て大林和尚を敬し爲めに此寺を創建し、國師大林和尚を以て開山とし之に居らしむ、元和元年兵火の爲めに此寺一たび焼亡せしむ、明年澤菴和尚、當時の茶人武野紹鷗、北向道陳、等に謀り以て當寺を再建す、故に澤菴和尚を推して中興の主とす、元和九年七月十日徳川秀忠將軍入御あり、尋て同年八月十八日徳川家光將軍入御あり、寺領百十石、豊臣氏の時より維新の際に至るまで世々之を賜ふ。

第六章 大安寺

大安寺は、京師東福寺の末寺にして、南宗寺の東に在り。應永元年、徳秀和尚の草創にして、足利義滿義持及び代々の將軍皆此の寺を崇め敬ふ、當寺の佛殿は、昔の豪商納屋助左衛門の寄附せし自家の書院にして松永久秀の刀痕ある柱なり、其の他方丈佛殿等の障壁には有名なる畫多くして狩野古法眼元信并に同永徳の畫く所なり、就中松の畫は永徳曾て畫き終りて直に東國に

赴き道尾張の鳴海を過ぐ偶々路傍の松枝葉生
ひ茂りて眺め佳なるを見て前日の盡未た其妙
を尽さざるを想ひ再び此の寺に還り其の松に
一枝を盡き添へると云ふ故に世之を枝添の松
と稱す

第七章 妙國寺

妙國寺は日蓮宗無本寺にして永祿五年權大僧
正日光の創立なり後元和の際兵火に罹り焼亡
す寛永四年日光五代の嗣僧日現と云ふ者本堂

を再興し以て漸々現今の廣大なる形狀をなす
に至る、本堂の後に、大なる蘇鉄あり、有名なる樹
木にして頗る壯觀なり、織田信長、曾て此の木を
愛し近江の國安土城に移し植へると雖も、後故
ありて又塚に戻せりと云ふ、塚に來りて名所古
跡を見る者は、皆先づ此の寺を尋ねて、此の名木
を賞す。

天正十年六月、徳川家康、此の地に來ることあり
て、當寺に宿す、時に織田信長、京師に於て其臣明
智光秀の弒する所となる、家康之を聞き直に京

師に入て、光秀を伐たんとす、侍臣の諫めにより、伊勢を過ぎ遠江國濱松に歸る、後慶長十九年大坂冬の戦に際し、家康再び此の寺に來り、諸軍の事を議す。

嘉永、安政の際、外國の船屢々我國に來り交易の事を幕府に請ふ。幕府深く外人の暴亂を恐れ、爲めに沿海の國々に砲臺を造らしむ。堺浦の砲臺亦た此の時に出來たり。其後近國の武士をして、爰を守らしむ。明治元年二月、佛蘭西人數名船に乗り此の地の海邊に遊ぶ、砲臺の番兵、土洲の藩

士十數名之を認めて撃ち殺せり。是に於て佛蘭西の公使我幕府に逼りて、土洲の藩士を、相當の刑に行はれん事を請ふ、乃ち番兵十餘人を、妙國寺に集め死を賜ふて自殺せしむ。其墓今尙は此の寺の近くにあり。

第八章 祥雲寺

祥雲寺は、京師、紫野大徳寺の末寺にして、寛永二年澤庵和尚の草創なり。庭中の五葉松は、古より頗る有名にして、妙國寺の蘇鉄と共に堺の名木

なり。

第九章 開口社

開口社はもと三村大明神と稱す、蓋し古へ木戸、原、開口、三村の境にあるを以てなり。祭神は伊弉諾尊の御子、事勝食勝國長狹命、及び素盞鳴尊、生國魂命の三神なり。神功皇后、三韓を征し歸り給ふの時、祭らる、古は社領も多くして、住吉外宮と稱し朝廷より、二十年毎に一度、住吉神社と共に造替せらる。此の社もと神、佛、兩部に屬し、寺を密

乗山、大念佛寺と稱す、故に俗に之を略して、大寺と云ふ。其の後維新の際、寺は廢せられ、唯だ單に神社となり、開口社と稱せり。

第十章 菅原社

菅原社はもと天神社と稱し、祭神は贈正一位、菅原道真公、天穗日命、野見宿禰命の三神なり。當社は、元來菅原氏の舊領地なりと、大鳥郡、塩穴郷、湊村に在りて、塩穴天神と稱せしを、中古此の處に移せりと云ふ。此の地も亦、神、佛、兩部に屬し。寺を

威徳山、常樂寺と稱し、天台宗、比叡山、延歴寺の末寺たりしが、維新の後、寺は廢せられ、唯だ單に神社となり、菅原社と稱せり

第十一章 宿院

宿院は、昔住吉大明神、毎年六月三十日に、渡御ありと御旅所なりと、云ひ傳ふれども、今は大鳥、住吉、兩大神を祭り、乃ち雨神社の御旅所なり。此の處は、堺市中最も繁盛の場所にして、境内に胃社、飯匙堀等の名所あり。

胃の社は、元と雛横小路にあり、後宿院に移す。蓋し神功皇后、三韓より歸り給ふの日、胃を此に納む、白鳳年中、此の社を建て八幡大明神、神功皇后、玉依姫を合せ祭る。

飯匙堀、亦た宿院にあり、干珠、滿珠の寶を埋むるの地なり。或は云ふ干珠、滿珠は紀洲日前宮に納むと、蓋し何れか眞なる、未だ詳ならず

第十二章 方違社

方違社は、堺市街を去る凡そ五町の東にあり、神

功皇后、三韓を征と歸り玉ふの日、住吉大明神及び渚の神と、此の地より攝津に遷坐するに當り方違ひの事をなと玉ひと所なり。其東南に、向井神社あり境内櫻樹及び四時の草花多きを以て、來遊の客群り集まる。

第十三章 大仙陵

大仙陵は、方違社を去る南凡そ五町にありて、人皇、十六代仁徳天皇を葬むるの地なり。帝在世浪花高津に都と給ふ、曾て高樓に登り、人煙の稀お

るを見給ひ、百姓の苦みを察と、天下に三年の租税を免と給ひとことは、皆な人の知る所なり是に由りて、後世此の處に來りて、參拜する者は皆帝當世の仁政を想ひ、有難く感せざる者なと。其南北を去る、凡そ五町にして、各一の帝陵あり、南にあるものを、履中天皇の御陵とと、北にあるものを反正天皇の御陵とす。

第十四章 武人

我が國、古より武を貴ぶの風あれども、塚はもと

文學、技藝に秀でし土地なれば、武人の有名な者、甚た少く、僅にして小西行長、木戸作左衛門、等の人々あるのみ。

小西行長は、小西如清の子にして、其家代々薬商と業とす。行長幼にして、豊臣秀吉に近侍し、長とて後、攝津の守に拜し、領地を肥後國に賜て、宇土の城主となる、文祿年中、秀吉朝鮮を征伐するに當り、行長一番鎗となり、敵の城を攻め落すこと、度々なりければ、大に功名手柄を、支那、朝鮮の諸國に振ふ。慶長五年、石田治部少輔三成の叛逆に

くみし、徳川家康と、美濃の關が原に戦ふて亡ふ。木戸作左衛門は、行長の臣にして、朝鮮の戦に行長と共に著しき手柄あり、其功によりて、主殿頭に任ぜらる、行長亡ふるの時、同トく戦死す。其血筋今尚ほ塚にあり

第十五章 文學

足利氏の時代に於て、堺は京師と共に、近畿の大都會たりし事は、前章既に之を言へり。故に其頃文學の盛なる、敢て京師に譲らざ、是に由りて當

時、和歌、連歌、師等の世に出づる者亦少なからせ。牡丹花肖拍、及び宗椿は、其最も有名なるものなり。

肖拍法師は、具平親王の末孫にして、堺の人なり。自ら牡丹花と稱し、幼時より連歌を好む、長ぜるに及て、宗祇に従て學び、大に得る處あり。大永七年四月四日卒す、年八十五歳なり。此の人性酒を好み、又香を愛し、花を樂しむ、名けて三愛と云ふ。曾て庭前の牡丹を詠トて曰く

春咲るぬ、花のこゝろや、深見草

又禁裡十五夜の、御會に出で、

空に置いて、見ん夜や、幾夜、秋の月。

或る人、雨乞の歌を、望みける時、

空に知るや、雨を望みの、秋の空。

とよめり、此の他尙ほ名句の、世に知らるゝもの、甚た多し。

連歌師、宗椿は、牡丹花の門人なり、曾て源氏物語を、手寫すること、二十部、終に朝顔の卷に至りて卒す、牡丹花、爲めに哀み、詠トて曰く、

筆に、そめ、心にあけと、契りとや、

おりのも消し、朝顔のつめ。

第十六章 技藝

文學の隆盛なりとと共に、諸の美術、技藝の如きも、亦甚た盛なり、中に就て、茶人最も多し。武野紹鷗、北向道陳、千利休、等の如きは、皆有名なる茶人なり、趙陶齋、亦た能筆を以て著る。

武野紹鷗は、堺舩松村の住人なり、曾て京師に至り、宗陳、宗悟の二人に就て、茶道の奥儀を究め、田舎宗匠の名、一時に高し、後堺に歸り、弘治元年十

月二十九日歿す、墓は南宗寺中にあり。

北向道陳は、紹鷗の友にして、亦舩松村の住人なり。家固より富有にして、茶道の宗匠たり。千の利休は、即ち其門人なり。

千の利休は、北向道陳の弟子にして、俗稱を、納屋與四郎と云ふ、魚商にして其家富有の聞あり、豊臣秀吉の、寵愛を受け、祿三千石を賜ふ、後讒言に遇ひて、死を賜ふて自殺す。其子道菴、并に養子少菴、亦た皆茶道の師匠たり。

趙陶齋、名は養と云ひ、字を仲頤と呼び、一に息心

居士と稱す。支那人、趙氏の末孫にして、長崎に生る。晩年堺に來り、櫛屋町濱に住す、近時能筆の名高し。此の人、天明年中に歿す、墓は南宗寺の中にあり。

第十七章 商業

元龜天正の頃、堺は我が國、商業の中心とも稱せられて、一時商業の盛んなること、實に言にも盡し難き程なりしが世移り物替るに従ひ、近き大阪の如き、大都會出來たるより、其商業の權力

次第に、大阪の地に吸ひ取られて、年々益々振はざるの、有様とはなれり、然れども、今尙ほ海灣に船舶の出入するありて、商品の賣買常に絶えず幸にして、近年倉庫會社其他種々の銀行、會社等の設立するありて、百貨流通し、稍昔の有様に立戻るの願きなきに非ず、其天正年間に於て一の豪商の、堺に見はるゝあり、納屋助左衛門乃ち其人なり。

納屋助左衛門は、堺の人なり。天正年中、呂宋に渡り、文祿三年七月、我が國に歸る。其の時傘千本蠟

燭千挺、燐香二疋を持ち歸りて、豊臣秀吉に献ぎ。且つ彼の地より、買ひ來りし種々の珍らしき、物品を賣り捌きて多分の利益を得たり。其家固より富有なるに、今又此の夥しき利益を得たることなれば、生計俄に奢りて、坐敷の書院には諸種の寶を彫り附け、金銀の屏風を立て廻せし等の事、常々なりし、一日和州志貴の城主、松永久秀此の家に来り、大に其奢りを戒しめ、帶ふる所の刀を以て、其柱を打つ、後其書院大安寺に寄附す、刀痕今に尙ほ存せり。

第十八章 工業

堺は、古より工業隆盛なるの土地にて、近年は、一日より、益々盛大の姿に立ち至りて。大阪の如き大都會と雖ども工業の一端となりては、自然堺に一步を譲らざるを得ず。其古にては、絹帛、鉄炮、庖刀等の製造業あり。現今にては、紡績會社、酒造會社、及び起業會社等の設立ありて、製糸、精酒、段通、玉簾、煉瓦等の産物、年に増し日に加りて、海外諸國に輸出するに至る。

鉄炮は、薩洲島津氏の家臣、種子島兵部丞時堯と云ふ者、此術を支那より傳授す、當時堺の住人、橋屋又三郎、又其の道を傳へて、之を鍛錬し普く諸國に流布して、遂に當地の名産とはなれり。又大砲の鑄造は、堺櫻之町の人、芝辻氏代々之を業とす

近き明治の初年より、段通製織を發明し、年々次第に改良を加へて、遂に遠く歐米諸國に販路を廣む。今明治二十六年米國大博覽會開設するに當り、藤本莊太郎氏、自ら米國に渡り、廣く彼の國

諸工業の實況を探り、究めたり、氏の如きは、實に明治の工業家と云ふ可し

第十九章 風俗

堺は、大阪に接近するの場所なるに由り、其風俗等も亦自然大阪に眞似びて從來質朴の氣風に加ふるに、少しく奢侈の飾りを以てす然れども、大阪の如き衣食に奢ることなく、唯た家屋の建築上に至りては、金銀を惜まざ、堅固に之を營むの風あり

第二十一章 結論

夫れ堺は、既に昔外國との交易場にして、通商賣買盛んに行はれ支那朝鮮の船舶、常に往來し、市街亦た從て繁榮なり。然るに中古豊臣秀吉大阪城を築てより以來、大阪の地、日に繁盛に赴き、堺市の商業漸く衰へ、唯た其依然盛大なる者工業の一事業なるのみ、然れ共、物衰ふれば、早晚復た榮へる時あり其商業の衰へしを引き起すの策、將に後進の子弟を待ちて以て之を謀らんとす。堺史談終

明治貳拾七年二月五日印刷
 同 年二月十五日發行

宗價金八錢五厘

大阪府堺市市之町西壹丁貳拾番屋敷

著 者 河 盛 彦 三 郎

大阪府堺市市之町東三丁貳拾九番屋敷

發 行 者 今 井 清 治 郎

大阪府堺市南旅籠町四番屋敷

印 刷 者 酸 谷 恒 三 郎

大阪府堺市市之町東三丁貳拾九番屋敷

發 兌 今 井 書 房



版 權 所 有

